

令和元年度 学校評価報告書 (目標設定 (実施結果))

視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月6日実施)	総合評価 (3月25日実施)	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	生徒が自ら課題を発見し、主体的に学ぶ意欲を高める授業を展開するとともに昨年度までの取り組みの成果をベースに生徒一人ひとりの一層の学力向上を図る。	○基礎的・基本的な知識・技能の習得を図るとともに、主体的・対話的で深い学びを実現する授業の実践を通じ、生徒の一層の学力向上を図る。 ○I期「ICT 利活用授業研究推進校」の取組の成果と課題を踏まえ、II期3年間の計画を定め、新たな取組をスタートさせる。	○生徒の基礎的な知識・技能の習得のための指導を継続的に実践しつつ、協議や討論など協働学習の機会を積極的に設け、思考力・判断力・表現力等を涵養する。また、教職員相互の授業参観の機会を増やし、授業力の向上を図る。 ○I期で主題とした、授業におけるICT利活用、家庭学習におけるICTの利活用、校務効率化のためのICT利活用の3点を継承・深化させるべく、取組を工夫する。	○「神奈川県立高等学校生徒学力調査」結果や「生徒による授業評価アンケート」結果などにおいて、昨年度の課題事項に改善が見られたか。 ○II期「ICT 利活用授業研究推進校」研究指定としての3年間の実践を計画し、取組をスタートすることができたか。	○教職員相互の授業参観の機会を年3回に増やし、授業力の向上を図る体制を整えた。生徒アンケートの数値も、関心意欲や深い学びに関する項目で、昨年度に比べ改善が見られた。 ○ICTについては、I期の取組に加え、教科横断的な実践や、同じ科目を担当する複数の担当者が同じ実践を行うなど、組織的な取組も行うことができた。	○「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践のため、学校全体として更なる授業改善の取組を推進する。 ○ICT利活用授業研究推進校として、II期3年間の取組がスタートした。ICTをツールとして日常的に活用するための環境構築をさらにすすめていく。	○授業アンケートの結果などから、これまでの取組に対して成果が上がっているものと思う。アクティブラーニングへの取組も成果が認められる。 ○すでに取り組みされているようだが、次世代育成の観点から、生徒自身により効果的なICT利活用の方法を探らせることも有効と考える。	○「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践については、一定程度定着したものと考える。一方、生徒の進路希望を実現するためのより高い学力を身に付けさせるためには、更なる授業研究が求められる。 ○ICT利活用については、すべての教員が一定程度実施できる状態となったが、その活用方法が必ずしも有効なものになっていない場合がある。	○年3回に増やした教職員相互の授業参観の機会を活用し、互いに学びあい、研鑽しあう機会を充実させ、授業力の更なる向上を図る。 ○ICT利活用については、校内研修を充実させ日常の授業についての内容をさらに充実させるとともに、年1回の公開授業研究会を活用してより質の高い授業の在り方について検討する。
2 生徒指導・支援	自らの行動をもって他の範となる規範意識と他を思いやる豊かな感性とを兼ね備えた高い人間性を育成する指導方法を確立させる。	○豊かな心と健やかな体、そして他の範となる規範意識を身に付けさせ社会に貢献できる行動力を養う。 ○安全かつ安心な環境で学校生活を送るための共生と他者理解を促す。	○学校行事・部活動・委員会活動等を通して、主体的に行動できる力と他を思いやる豊かな感性を育て、地域社会に積極的に貢献していく資質を育む。 ○定期的な登下校指導、服装指導、集会・掲示物等による啓発活動により、生徒一人ひとりのモラルアップを目指す。 ○支援を必要とする生徒への迅速な対応のため、スクールカウンセラーや情報共有会議を有効に活用する。	○アンケート調査等による自己肯定感項目や達成感項目において、プラス評価が90%を継続できたか。 ○生徒の日常生活の観察、個人面談、アンケート形式の意識調査により、モラルアップが図れたか。 ○支援が必要な生徒について情報を集め、チームで迅速な対応ができたか。	○前期は学校行事、後期は部活動等の学校生活についてアンケート調査を行い、共にプラス評価が90%であった。行事・学校生活ともに目的意識をしっかりと持って取り組んでいた。 ○アンケート形式の意識調査を10月に実施し、学年及び教科担当者と共に共有した。 ○支援が必要な生徒への対応を円滑に進めることができた。	○行事等の引き継ぎは、生徒会が中心となってスムーズに行えるようになってきたので、引き継ぎ内容が充分であったか精査し検討を加え、年度の切り替えからしっかりとスタートできるように準備を進める。 ○近隣からの苦情を例年と変わらず受けているので、指導方法を検討しつつ、生徒への啓発指導を強く続けていく。 ○学年、担任、保健室、教育相談コーディネーター、スクールカウンセラーとの連携と明確な役割分担がスムーズに行われるよう検討する。	○他者を思いやる心を育てることは大切だ。「他人・社会に奉仕する心」を培うため、「ボランティア部」のような部活を設立するのはいかがだろうか。 ○苦情への対応は必要だが、あまり上から押しつけるような指導は望ましくない。地域から秦高生は大丈夫だと思われる。 ○担任・保健室・教育相談コーディネーター・スクールカウンセラーとの連携は中学校でも課題となっている。	○「文武両道」「質実剛健」を校訓とする本校において、学校行事・部活動・委員会活動等を通して人間形成を図る取組は十分機能していると考えられる。その一方、リーダーとして必要とされる主体性・計画性の部分について、やや弱みがある。 ○登下校時の交通マナーについては一定程度保たれているが、地域からの苦情がないように努めなければならない。 ○支援が必要な生徒への対応はできていると考えるが、専門職によるケアが必要な生徒が少なからずいる。	○文化祭や小体育祭などの学校行事の運営における生徒主体の場面をより多く設定し、生徒の主体性・計画性の育成をさらに進めていく。 ○本校は多くの生徒が自転車で通学していることもあり、より計画的に交通安全指導を行っていく。 ○様々なケースに的確に対応できるよう、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、外部専門機関等との連携をより深めていく。

	視点	4年間の目標 (平成28年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月6日実施)	総合評価(3月25日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
3	進路指導・支援	グローバル社会で活躍する人材育成のため、自己探究から自己実現に繋げるキャリア教育を推進する。	○職業観及び人生観の育成を図り、自己の進路に対して関心を高め、進路実現を図る。 ○グローバル社会で活躍する人材育成のため、言語・習慣などが異なる人々との交流の機会を設ける。	○進路探究学習やインターンシップを通して「なりたい自分」を意識させ、講演、体験授業、進路面談等により意識の高揚を図る。 ○小論文指導、模擬試験等を通して、実力の養成を図る。 ○カジョリーナ・シニアカレッジ(姉妹校・オーストラリア)との交流を通して、生徒のグローバルな視点で物事を考える力の向上を図る。	○アンケートにより、進路に関しての意識の高揚が確認できたか。 ○進学準備者を除く進路決定数の割合が前年度を上回ったか。 ○姉妹校交流後のアンケートで、その取組や成果について、肯定的な回答をした生徒が80%以上いたか。	○インターンシップ参加者は86名で、昨年度より4名増だった。進路意識に関してはアンケート調査で74%意識の高揚が確認できた。 ○模擬試験を通して自己の課題の発見を促すことができた。 ○8月実施の姉妹校訪問後アンケートと同様、1月実施の姉妹校受入後アンケートでも肯定的な回答は90%を超えた。	○インターンシップ参加者の内訳として、看護・保育以外の分野への参加と男子の参加を増やしたい。事前指導と情報提供の方法の工夫が必要である。 ○模試の分析から課題の発見を確認できたが、その解決方法の分析に至る生徒は全体の60%だったので学習習慣や学習方法の改善の指導が必要である。 ○語学力・コミュニケーション力向上や相互の文化の違いに対する理解をむけ、事前学習の充実を、さらに図る必要がある。	○卒業生のネットワークを活用し、ぜひ男子生徒が積極的にインターンシップに参加できる場を広げてほしい。 ○グローバル人材育成の一環として、姉妹校交流を深めながら言語・風俗・慣習など異文化理解を進めるのは有益である。これに加えて、英語以外の他言語も勉学に取り入れられたらいいだろうか。	○インターンシップをはじめとする多様な取組により、生徒のキャリア意識は着実に高まっていると考える。今後はインターンシップへの男子の参加を増やしていきたい。 ○進学状況は好調だが、より高い進路希望を実現できるよう工夫する必要がある。 ○姉妹校交流も軌道に乗り、取組の質は確実に向上している。一方、このよい影響がすべての生徒に波及しているとはいえないので、その取組に工夫の余地がある。	○より幅広い職種のインターンシップ先を開拓するとともに、オリエンテーションを充実させるなどの工夫をして参加者の増加を図る。 ○授業研究を充実させ、新入試体制に対応できる学力を身に付けさせる。 ○姉妹校訪問、受入の在り方に工夫を施し、取組の成果がより多くの生徒に還元されるように工夫をする。
4	地域等との協働	①地域との連携を、今以上に密にし、地域からの信頼を深める。 ②学校の新たな特色の広報・情報発信を積極的に図る。	②学校の特色を整理し、より分かりやすく広報・情報発信を積極的に行っていく。	②学校説明会や学校案内、ポスター等、学校の特色が伝わるように工夫する。 ②ホームページにおいて、9月から移行するコンテンツ管理システムをより見やすく、特色もわかりやすくなるように工夫する。	②学校説明会のアンケートにおいて、8割以上に学校の特色を伝えることができたか。 ②新しいホームページにおいて、見やすくなりわかりやすくなっているかどうか。	②学校の特色について伝えることができていたというアンケート回答が第3回・第4回ともに100%であった。 ②新しいホームページに移行し各グループで運用できるようにした。	②学校説明会において、来年度も引き続き学校の特色が伝わるよう工夫・準備するとともに、学校の様子がより分かりやすく伝えられるようグループで検討していく。 ②新しいホームページの運用について、新鮮な情報が頻繁に更新できるような方法を構築していく必要がある。	○中高連携事業が実現できればと考える。例えば「DIG 研修」などの防災訓練を、高校生が中学校に来てリードするなどが考えられる。 ○学校経由の地域活動はずいぶん貢献していると思う。地域でも、受け入れの工夫を考える。	○学校説明会だけでなく、地域での本校生の活動なども含め、本校の特色を地域に十分発信できたと考える。さらに地域への貢献につながる発信を推進したい。 ○新たなホームページは順調に機能しているが、部活動等で情報発信の頻度に差がある。	○生徒の自主性を生かして、さらに地域への貢献につながる発信を推進する。 ○ホームページ作成の手法に多くの教員が習熟し、より新鮮なトピックの掲載を進める。
5	学校管理 学校運営	①生徒の安全安心を確保し、落ち着いた学習活動・部活動・学校行事等に取り組める学習環境を整備する。 ②不祥事防止に真剣に取り組み、職員集団のチーム力を高めるとともに、働きやすい職場環境づくりを進める。	①生徒・職員の防災意識の向上を図り、生徒が落ち着いた安全安心に学校生活を送れるように、教育環境を整備する。 ②事故防止を意識し、より働きやすく、かつ不祥事の起きにくい職員室の環境整備に努める。	①防災マニュアルに、秦野市と協議を進め策定する「災害時の初動体制」について加えるとともに、マニュアルを意識した防災訓練やシェイクアウト訓練、DIG 研修等を実施し、生徒・職員の防災意識の向上を図る。 ②各グループや学年ごとに関係する文書ファイルの保存場所や会計関係書類の保存場所を明確化させ、書類の散逸や誤廃棄などの不祥事を予防できるよう、職員が相互に確認し合える職場環境づくりを進める。	①防災マニュアルを意識した防災訓練や研修を年3回以上実施できたか。 ②職員室等の書類保存棚の整理を進め、文書ファイルの保存場所や会計関係書類の保存場所を明確化する体制が構築できたか。	①防災訓練、シェイクアウト訓練、DIG 研修等を年4回実施できた。秦野市との「災害時の初動体制」についての協定を更新することができた。 ②各グループや学年の保存棚の整理の指針を示し、統一化された整理の仕方が組織的に意識されるようになってきた。	①防災訓練の在り方や、生徒・職員の防災意識をより効果的に向上させる具体的な手立てについて、引き続き検討を行っている。 ②来年度の耐震化工事による職員室の仮設校舎への移動に向けて、不祥事予防だけでなく、業務の効率化も見据えた職場環境づくりを、引き続き職員一丸となって進めていく。	○防災訓練は、初期消火や生徒誘導、管理職や防災担当不在時など、有事を想定して様々な形で実施することが大切である。 ○秦高生は自転車通学者が多いので、交通事故にあわないよう十分な注意が必要である。 ○文書管理による事故防止では、ICT利活用も有益だが、働き方改革の視点も大切である。	○防災マニュアルに基づいた訓練は着実に実行することができた。次年度は校舎の耐震化工事にともない、生徒の一部は仮設校舎に移動するので、新たな状況に応じた取組が求められる。 ○文書ファイルの保存場所や会計関係書類の保存場所を明確化させ、書類の散逸や誤廃棄などの不祥事は発生しなかった。ICT化をさらに推進し、効率的な文書事務・文書管理に努めたい。	○仮設校舎への対応を含む防災マニュアルを速やかに作成する。 ○ICT 利活用授業研修推進事業とリンクして ICT 化をさらに推進し、効率的な文書事務・文書管理を推進する。